

友の会 35 周年台湾交流の旅特集



八田与一記念館



国父記念館音楽交流会



天燈上げ

台南・高雄方面にも行きたいと、予てより友の会の方々に申し上げ続けた甲斐があつてか、この度、ツアーの一員として、総勢 34 名の中に加えて頂くことができました。4月12日(金)～15日(月)の三泊四日の日程で、台南・高雄・台北の台湾三大都市を巡るといふ強行軍。だからでしょうか、朝食開始時間の繰り上げが、ホテル側の担当者に伝わっていなかったり、高雄・台北間の新幹線乗車切符が人数分届いていなかったり、コンサート会場の状況が不明だったり等々、直前での様々な変更や不測の事態に遭遇しましたが、みんなで協力しあい、その都度、上手く楽しく乗り越えました。コンサート終了直後、バスに移動する道すがら、「どんな状況やリクエストにも即座に対応される皆さんは、本当に素晴らしいですね。感動しました。」と私が申し上げると、張文乃先生は「何も特別なことではなく、普段から練習を積んでいるから、変更があっても臨機応変に対応できるの。レパートリーも 300 曲ぐらいはあるかしら。当たり前のことよ。」と事も無げに仰います。備え有れば憂い無し。日々の鍛錬の賜物なのだと拝察します。台湾も日本式市民マラソンが盛んで、日没後、大会が開催され、完走のためのボランティアの応援や補助活動を沿道から眺める機会に恵まれました。台湾は親日家が多く、カタコトの日本語が話せるのをアピールするように、宿泊ホテルに戻る僅かな時間にも、積極的に誇らしげに話し掛けられます。台湾の方々が日本文化や日本語に敬意や憧憬の念を払ってくださるのは、非常にありがたいことです。私たちはこの親日的・友好的な態度に甘えず、時々外から意識的に日本文化や自分自身を見つめ直す必要があると思いませんか？更に、日本や日本語を客観的に見る契機にしてみませんか？言語は伝達道具(ツール)に過ぎず、伝達内容や中身の方が大切

なので、尊敬され、手本となるに値するよう、私達一人一人が、常に自己の内面や言動を磨き、高める必要があります。同時に、日本で生まれ育った者として、日本の伝統文化や日本語に対する自尊心を高め、後世に伝えることも必要です。そうすることで英語や中国語などの言語を表面的に学ぶのではなく、互いの文化的背景を理解尊重してこそ、心と心の、真の交流ができるのではと考えていました。ところが、コンサートを拝聴しているうちに、音楽は人の心を和ませ、通わせられる共通の言語だと気づいたのです。戦前の日本教育を受けた台湾の高齢の方々が、「故郷(ふるさと)」や「仰げば尊し」を日本語で唱和され、涙されるのを目の当たりにして、胸が熱くなりました。加えて、中国語歌の「阿里山の姑娘(アリシャンディクーニャン)」をコーラス部の方々が合唱されると、居合わせた老若男女も一緒に歌われ、会場は大いに盛り上がりました。繰り返しになりますが、こうした親日的・友好的対応に甘えて、喜んでばかりはられません。台湾では名高い八田与一氏も、日本での知名度は極めて低いのです。三泊四日の旅では、やはり「走(ツォウ)馬(マー)看(カン)花(フウオア)(走る馬から花見をする)」のようなもの。私は大雑把に粗略に見て、浅薄な解釈をただけです。表面的な台湾理解に過ぎません。台湾も中国文化も奥深く、一生懸けても究められないでしょうが、次回は、「下馬(シアマー)看(カン)花(フウオア)」したいと願っています。と書いて、大きな「忘れ物」をしたような気分が襲われます。否、「心」自体を置き忘れたのかもしれませんが。私達が忘れてしまった懐かしい昭和の雰囲気町の並み、温かな人情…。それらを取り戻すために、「心」を置いてきた台南や高雄に、里帰りしたくなりました。(中国文化同好会 金川 幾久世)

この度は、移情閣友の会の皆様方と一緒に【訪華交流演奏の旅】に参加させて頂き、心から感謝申し上げます。私も会員ではございますが、皆様方とお会いする機会が少ないので、一緒に美味しいお料理を頂きながら、いろいろなお話をさせて頂き、本当に思い出に残る楽しい時を過ごさせて頂きました。今回、日本の民族楽器である《よし笛》と歌で、日本の懐かしい童謡を演奏させて頂き

ました。日台友好架け橋のほんの一端でも担えたのでしたらとても幸せに存じます。

最後になりましたが、林同福会長、後藤様、周様、陸様はじめ、皆様方にご大変お世話になりましたこと、深くお礼申し上げます。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(濱寄 繁一)